



品格

初場所で劇的なカム・バック優勝を果たした朝青龍は、喜びのあまり神聖な土俵の上で派手なガッツ・ポーズをしてしまった。そのことが横綱審議会の委員の間で、横綱の品位を傷つけるものではないかと問題視されているようだ。しかし、横綱審査会の内規では、横綱推薦の条件として「品格、力量が抜群であること」が定められているのだから、もともと日本の国技である大相撲に求められる多くのしきたりやルールから逸脱しがちだった朝青龍を、敢えて横綱に推薦した横綱審議会委員の「品格」の方こそが問題視されるべきではないか。

「品格」とは「どことなく感じられる気高い品位、気品」(広辞苑)のことで、一時、数学者・藤原正彦氏の「国家の品格」というベストセラーで世間を風靡した言葉だが、ただ、横綱審議会の委員にとどまらず、最近のわが国では、政界、財界、教育界などなど各界の指導層に品格のなさが目立つ。

一例として、最近の麻生首相と小泉元首相との間の言葉のかけ合いにそのことが如実に表われている。麻生首相は、漢字が読めないことから始まって、ぶれにぶれる数々の迷走発言に加え、遂に自らが閣僚であった小泉内閣の大目玉であった「郵政民営化」について「反対であった」とまで言い切って小泉元首相の反発を買ってしまった。それに対し小泉元首相は、なかば私怨にかられて麻生氏の発言を「笑うほどあきれた」と罵倒し、さらにあるうことか、政権与党できちんとした手続きを踏んできた「定額給付金」について「あの時賛成したが、実はそうではなかった」と言われたくないから、「三分の二(の衆議院での再議決)を使ってでも成立させなければならぬ法案とは思っていない」とまで言ってしまった。これは明らかに、麻生氏の「郵政民営化反対」発言への当てこすりであって「目糞鼻糞を笑う」類の「痴話喧嘩」に等しい、まことに品のない話である。

政治家といえば、最近、議員バッジを付けながら、テレビで漫才師とじゃれ合っている面々の姿は、政治の漫才化を招くものであって、まことに嘆かわしい。以前では、人間は「四十才になれば自分の顔に責任を持つ」と言われていた。自らの人生を、生きがいを感じながら修業を重ねて生きていけば、四十才に達する頃には、その顔に自ずからなる品格が備わってくるものなのである。ところが、今でも繰り返し放映される中川前財務相の居眠り会見の「顔」のごときは何と品格のないことか。彼は五十才を超えてなお、自らの顔に責任を持つことができなかつた。反面、学問、芸術、技術、スポーツなど、いずれかの分野において、ひたすら勉学につとめ、修業を積み、一つの道をひたむきに歩み続けてきた人々の「顔」には、美醜を超えて人の心を打つ風格が備わっている。

私は、現職の時にいつも思っていたのだが、駐在所の巡査などで地域住民の生活の中に溶け込んで、よろずの相談事にあずかって住民の厚い信頼を勝ち得ている地域の警察官、さらに、捜査一筋に取り組み、被害者からも信頼されているベテラン刑事などの方々の「顔」と「姿」には、言い知れぬ「品格」を感じていた。ただ、自らの損得や生活の利便さのみを追う自堕落な生活を送っている人は、人の心を打つ「品格」は生まれぬ。強い意志で高い理想を掲げ、自ら困難を求めて、難関を打破していく努力を積み重ねていかなければ「品格」は備わってこない。

各界指導層の中の少なからぬ人々に「品格」が感ぜられないことは誠に残念であるが、次代を担う若人には、決して「前車の轍」を踏むことなく努力と精進を重ねて、自らの「顔」に責任が持てるよう「品格」を高めてもらいたいものである。